

第2章 銃後

勤労動員

わんわん泣いた 戦争が終わった日

竹内かよ子たけうちかこさんのお話から

私は、昭和五年（一九三〇年）に南小樽みなみおたる駅の近くで生まれました。今、小樽おたるは観光のまちなくなっていきますけれども、そのころの小樽おたるは日本でも有数の商業都市だったのです。そして、港には外国の船なども入って、いろいろな銀行もたくさんあって、本当ににぎやかだったのです。

昭和十二年（一九三七年）の七月、ちょうど私が一年生のときに、今の中国、支那しなとの戦争が始まりました。

そのとき私は小さかったので、戦争のことは全然分かりませんでした。南小樽みなみおたるの駅から出しゅっ征する兵隊さん方をお見送りしたり、戦争の成果が上がったら、日の丸の小旗を持って、「万歳、万歳。」と昼なら旗行列、夜ならちようちん行列なんていうことも大人と一緒にやったりしました。

学校では、毎朝、運動場に全校生徒が集まって、校長先生のお話がありました。昭和十六年（一九四一年）十二月八日の朝、ラジオの放送で日本が米英と戦争状態に入いったという放送を聞いたのです。それを聞いて、今までの支那しな事変じへんが大きくなって、戦争が拡大かくだいしたのだなという実感を受けました。その戦争のことを大東亜戦争だいてうあとも言ったのです。私たちは、アジアの諸国しよこくを助けるために始めた戦争だという教えを受けました。

そのころは、軍人勅諭ちやくゆというのがある、「軍人は忠節ちゆうせつを尽くすを本分とすべし。」というようなことで、兵隊の規則きそくのことを読んでいる文章ですが、すごく長いものを私たちは暗記させられて、一人一人教室に呼よばれて、先生の前でそれを暗唱したこともありました。

○出征 軍隊の一員として戦地に行くこと。
○支那事変 日中戦争に對する、当時の日本側の呼称。
○大東亜戦争 昭和十六年（一九四一年）十二月八日、日本政府はアメリカ、イギリスとの開戦後、それ以前から継続中だった日中戦争を含めて、「大東亜戦争」（大東亜とは東アジア・東南アジアのことと呼んだ。これに対してアメリカ側では、対日戦争を「太平洋戦争」と呼び、戦後の日本でもこの呼び名が定着した。

○防空頭巾 空襲などのときに飛んでくる物や落ちてくる物から頭部を保護するために頭にかぶった綿入りの頭巾。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

昭和十九年（一九四四年）の終わりごろから、戦争がだんだん厳しくなってきたなど感じるようになりました。防空演習や防火訓練などをやりました。そのころは、みんな防空頭巾という帽子に綿を入れたものをかぶっていました。また、敵機が襲来してきたときに明かりが漏れたら困るということで、電灯に黒い布を付けて光が外に漏れないようにしました。それから、敵兵が攻めてきたら、槍とか、なぎなたで敵を突き落とそうというような訓練をしました。

今から六十四年前の昭和二十年の三月に東京でものすごい大空襲があつて、本当に焼け野原になつて、大勢の人が亡くなりました。名古屋や大阪などの主な都市も空襲でやられてものすごかつたそうです。

北海道でも、函館や室蘭や帯広などは敵機の襲撃があつて、亡くなった人もいたということを後で聞きました。小樽では、港の船を目掛けて敵機の襲来がありました。

敵機の襲来があると、警戒警報というものから空襲警報に変わります。空襲警報発令となつたら、サイレンがものすごく鳴るのです。空襲警報があるど、みんなで防空壕に入りました。小樽は、掘った防空壕ではなくて、問屋街で蔵があつたので、蔵の地下室に逃げた記憶があります。



イメージ図

木の筒で魚の皮をなめして靴を作成

○援農 日本全国で十二歳から十五歳の中学生や女学生が働きの男性が戦場に行つて手薄になつた農村に働きに行つたこと。

○なめす 毛皮の毛と脂とを除いて柔らかにす

○降伏 戦いに負けたことを認めて、相手に従うこと。

昭和二十年は、学校で勉強することはほとんどなくなっていました。女学校でしたから、裁縫室というところがあつて、勉強する代わりにその裁縫室に集まつて、兵隊さんの着る軍服のボタン付けの作業などをしていました。そのうち、十勝の農家に援農に行つたり、小樽の靴工場に行つたり、貯金支局のお手伝いに行つたりしました。私は靴を作る工場に行つたのですが、そこで使うのは動物の皮ではないのです。細長くて、固くて、魚の皮だつたと思うのですが、それを軟らかくしたもので靴を作っていたのです。私たちは、その皮を木の筒でぼんぼんとたたいて、なめす作業をしていました。

工場の行き帰りにも「いつ敵機の襲撃を受けて死んでもいいように、穴の開いた下着を着ずに、少しでも身ぎれいにして死んだ方がいいね。」なんて話をしていました。

昭和二十年八月十五日のお昼に工場の広場に集まるようにというお話があつたので、みんなが集まりました。そこで、ラジオから天皇陛下のお言葉で、日本は戦争に負けて全面降伏したという声が聞こえたのです。そのとき、天皇陛下のお言葉だからみんな頭を下げて聞いていたのですが、戦争に負けたということを聞いた瞬



イメージ図

日本の全面降伏を知りうなだれる人々

間に頭が真っ白になってしまって、みんなも凍りついたようになってしまいましたね。夏でしたから、何かセミの鳴き声だけが聞こえたような気がしました。工場の人から学生はみんな帰るようになって言われて、もんぺ姿のまま、友達と泣きながら家に帰りました。「戦争に負けた、これからどうなるだろう。」と、わんわん、わんわん泣いた記憶があります。

でも、その日の夜になって、もう空襲警報がないということで、電気に付けてある黒い幕を外したのです。電気をつけたら明るくなりました。それで、「ああ、本当にこれで戦争が終わったのかな。」というような気持ちになりました。

戦争が終わってからの日本人は本当にすごかったです。日本全国を見たら、焼け野原のところがたくさんありました。そういうところから日本を復興させたのです。日本が元通りになるように一生懸命働いて、そして今の平和で繁栄している日本の基礎をつくってくれたのです。

私たちは、国を愛して、親を大切に、友達同士も仲よく、また兄弟も仲よくという教えを受けてきました。国の将来は子どもたちの肩にかかっているのですよという教えも受けました。この教えは、ずっと生かしていかなければならないことではないかと思えます。

戦争が終わってからもう何十年にもなります。世界中のどこかで今もまだ戦争が起きていることを知っていますか。戦争がなくなつて平和な世界になるように、私だけでなくて全員で願っていかねばならないと思うのです。

DATA

平成21年度白石区平和事業
聴き取り

- ・平成21年8月4日
- ・菊水やよい児童会館



竹内かよ子(たけうち・かよこ)さん

- ・昭和5年(1930年)生まれ
- ・白石区在住